最強の辿る道

しょたくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強の辿る道

【Ｎコード】
Ｎ３８４５Ｙ

【作者名】
しょたくん

【あらすじ】
彼は最強だった。そのせいでいつも、いつも怖がられ避けられて今も生きている。そんな彼がいきなり魔法が使える異世界に飛ばされる。
その世界の名前はラルク、その世界で彼はどう生きるのか…
主人公最強です。なおこの作品は不定期更新です。

プロローグ（前書き）

呼んでいただけたら幸いです

プロローグ

彼はいつも一人ぼっちだった。
学校ではいつも一人、いじめられてもない、別に太ってる訳でもない。
ましてや容姿が悪い訳でもない、むしろいい方と言っていい。
だが一人ぼっちだった。その理由…それは彼が最強だと言う事だった。

俺の生活はいつもつまらない。学校へ行っても、外を歩いても何処にいても…
いつも何処でも誰でも皆の反応は同じ、それがつまらない。
俺の名前は佐々木仁（ささきじん）１４歳、現在中学３年生のバリバリ受験生、
と言っても俺は自分で言うのもなんだが成績がとてもいい。
だから受験は困らないって…何の話だっけ？
そうそうなんで皆が同じ反応なのか…だったな。
俺は至って普通の中学生だけど…一つだけ違う所がある。
この世界の中で俺は最強らしい、自覚は…ないわけじゃない。

この世界で大きな戦争が１年前に起きた。俺の父親は戦争に行った。
俺も例外でその戦争に行った。戦場は酷い有様だった、死体、死体、
見渡す限りの死体、
ある者は錯乱して、ある者は今日食べた物全てを吐き出して…
でも俺はそれが全然平気だった。理由は分からない、だから俺は武
器も持たずに戦場を駆け回った。
ただ駆け回った訳ではない、自分の手足で敵の兵士を全て殺しなが
ら駆け回った。
楽しかった、とてもとても楽しかった。人を殺す感触、初めての殺
し、たまらなかった。

そして気付いた時には敵の大将、兵士、全て殺していた。
自分の身体が赤く染まっている事に気付く、自分の血じゃない。返り血だった。

「あ、あ、あああああああああああああ」

後から来る後悔、人を殺すと言う事をした後悔、それを吐き出すように
掠れた声で叫んだ。まるで死にそうな獣が出しそうな嫌な声、
そして俺には英雄の称号が与えられた…だがそれは建前の称号、本当はこう呼ばれている、
殺人者、卑劣な世界最強、錯乱者、まさに俺が敵を蹂躙して殺した時にそっくりだった。
だからこそ皆から恐れられている。この時に俺は世界最強として世界に知れ渡った。

プロローグ（後書き）

この後、第1話出したいと思います

第1話

俺の住んでいる世界は結構、科学が発展していると思う。
タイムマシンなんかは作れないが人工樹林とか言う全てが人工の木などがあり、
その木自体も成長してまた新しい子孫を作る事が出来るハイテクな木など

電話に至っては携帯から電話してきた相手の顔が見れるという機能がついている。
もしも誘拐などをして電話した即捕まえられてしまう。
でも…どんなにハイテクになってもやっぱり学校とかには行くわけで…

「つまらないな」

俺は机の上で突っ伏している。机は木などではなく授業はノートや鉛筆などを一切使わない。何故かと言うと机の中には情報端末が入っておりそこから先生の指示に従い問題を解く。だからほとんどと言っていい程喋ったりしない。
もし喋るとすれば、隣の席同士で話し合っているのを先生が注意する時くらいだ。
学校はつまらない、なんで来ているかと言えば給食がおいしいから…しか理由がない。
別に寝ていても先生から注意されず、誰にも気にされず、いつも突っ伏している。
だからつまらない、俺は覚醒しつつある眠気を再度呼び起こし意識を暗闇へと沈ませていった。

そんな事をしながら待っているとやっと授業が終わる。
給食だ。給食と言っても学食みたいな物だ。
俺はいつも最初に席を立ち、最初に教室を出て行く。
そしていつもの学食のおばちゃんにいつも食べている日替わり定食を頼む。
まぁこの学校で普通に接してくれるのはこのおばちゃんくらいなもんだろう。
今日の定食は鮭の塩焼きに漬物、味噌汁、ご飯と言ったメニューだった。
今日は和食を押しているらしい。偶にスパゲティとかがあるが…

「いただきます」

誰にも聞こえないような声で呟き、食べ始める。
俺の座る席の周りには誰も寄らず、俺の席の周りだけ、ポッカリと穴が開いているような気がする。こんなのも慣れているが…

「ごちそうさま」

また呟き、御盆をもって席を立つ。
今日の学校の楽しみが終了してしまった…。
俺はため息を吐きつつ午後の授業をフケる、だってつまらないから

俺は屋上で一人寝転がっていた。まぁいつもの事だが…
何度も言うようでしつこいと思うが、
この世界で俺は恐れられていて普通に接してくれる人は少ない。
でも偶に普通じゃない接し方をしてくる連中がいる。

「おい！」

寝ていると聞こえてくる声、何かと振り向くと１０人くらいの生徒、皆何かしら武器を持っている。

「何か用ですか？」

俺はいつもの様に用件を聞く。

「勝負せぇやぁ！お前が腰抜けだって事は分っとるんや」

この様な事が毎日のように起きる。どっかの誰かが俺が屋上(ここ)で寝ているのを教えてるかのように毎日違う連中が来る。

「…そうですか。別にいいですけど」

俺は面倒ながらもほっとくと五月蝿いので暇つぶしにいつも構ってやる。

男達は醜悪そうな顔で笑い始める。

「最後に言い残す事はあるか？世界最強さんよぉ」

「えっと…じゃあ一つあります」

「言うてみぃ」

「…貴方達は勝てない喧嘩をしに来る馬鹿ですか？」

俺は言いながらに男達を睨みつける。

「ヒッ！」

後ろの何人かが視線に耐えられずに逃げる。

「貴様！卑怯な！」

男は足が震えながらもこんな事を言ってきた。

「卑怯？馬鹿ですか？ただ睨んだだけですのに」

笑いながら男に近づく、男は尻餅をついて後ろに下がる。

「喧嘩を売ったのはそっちですから…」

俺は笑いながら男の足の近くに自分の足を叩きつける。それだけでコンクリートで出来ている地面に小さい足型のクレーターが出来る。

「ヒィ！化け物がっ！」

いつの間にか一人になった男が泣きそうな目で見てくる。

「え？承知の上で此処に来たんでしょ？」

俺は嘲笑いながらまた一歩と進み男の顔の目の前に自分の顔を近づける。

「やめてくれ！」

男は立ち上がり走って逃げ出そうとしたが俺が先に回りこむ

「逃げないでくださいよ、貴方にはまだ1発も殴ってないです」

俺は男にそう言い、腹を軽く1発殴った。

「がぁ」

男の声が響く。バキッと骨が折れる感覚、それが腕に伝わってくる、
男はそのまま地に倒れて動かない、

「骨、何本折れたのかな？」

まるで人事のように言う、だって人事だから、

「また退屈、どっか行こうかな」

俺はその男を残したまま、3階建ての屋上から飛び降りた。

そして現在、山に来ています。
え？なんで山に来てるかって？だって人少ないし
周りは人工ではない木がうっそうと茂っている。

「キレイなところだなぁ」

俺の歩いている道のすぐ横には深くて底が見えない谷がある。

「まさかねぇ小説みたいに此処に落ちるなんてベタな展開ある訳ないよねぇ」

笑いながら呟く、すると目の前に小さい女の子が谷底を見ていた。
俺はなんでこんな所に？と思い見た瞬間、女の子がいた場所の地面が砕けた。

「っ！」

俺は一瞬で加速して、少女を押して助ける、が…自分の事をわすれていた。

「あああああああああああああああああああああああ」

俺は現在急速落下中、うわ～もう上が暗くて見えないや～

俺は落ちる中こんな事を考えていた。

そして背中に衝撃が走った瞬間、俺の意識はすぐに刈り取られた。

「っ！？」

俺が目を開けるとそこは木がうっそうと茂る森だった。

俺は立ち上がる、そして現状確認、

「こんな木見たことない！」

はい決定しました～此処は俺の住んでいた所ではありません～

だって！木が！紫色なんだもん！ありえないよね！？

「マジかよ」

俺は一人森の中で呟く、そして不貞寝しようと座った時、悲鳴が聞こえた。

第2話

私は今日、自分の実力を試す為に森に来ていた。
その結果がコレである…

「イヤーーーー」

私は今、惑いの森と言う森に来ていた。この森は魔物が生息しており、とても危険な場所だった。私は魔法が使えるし…大丈夫かな？と思い入ってみたら、突然魔物に遭遇、
魔法の詠唱をしようと思ったら攻撃されて…今、逃げている。

「誰かー助けてー」

私は半ば混乱しながらも助けを求める。この場所に運良くギルドのメンバーか、
私がこれから入る学園の先輩が居てくれれば！などと考え、叫ぶ。
ふと後ろを見ると、私と同じくらいの男の子が魔物も前に立ちはだかっていた。
後ろで顔は見えないが…だが彼は何かが変だった。何が変かはすぐに分かった。
武器が何もないのだ。この世界では魔法が使える。だが必然的に使えない者もいる。
だがそういう人でも強い人はいるし、皆武器を持っている。
だが彼はそういった類の物を一切持っていなかった。服も黒い上下、防具とは言えない代物だし…

「君！危ないよ、早く逃げよう」

私は声を荒げて男の子に向かって叫ぶ。だが男の子は答えず、魔物に向かって走り出していった。

あんな事を言われたのは久しぶりだったような気がする。
俺に対して危ないと注意する事だ…懐かしい、子供と言っても今も子供だが、
ガキの頃を良く思い出す。

「ルルルル」

目の前に居るのは3メートル程の大きい熊なのかな？そいつが俺を睨みつけて止まる。
俺は熊が止まったと同時に走り出し、試しに熊の腹にストレートパンチを叩き込む。

「ルッ！？」

おお、反応あるねぇ、でもコレで倒れない奴久しぶりだわぁ。ていうか皆これで骨何本か折れて病院送りだもんね。

「ルゥ！」

熊もどきは怒ったのか俺の身体を鋭い爪で引き裂こうとした。それを俺はモロに喰らう。
だが血はおろか当たった所は赤くもなっていなかった。

「え？期待外れ」

俺は驚いて、熊も驚いて、後ろの女も驚いて、そして俺は熊に回し蹴りを叩き込む。

まぁ強さはちょい力入れた程度？まぁ以前これを壁にやったら粉々になっちゃったけど…
まぁそんな蹴りを熊に当てる。
熊は吹き飛び後ろに木に当たり、気絶したのか？

「弱いなぁ、激しく期待外れ…はぁ」

俺は溜息を吐いて後ろの女の方を見る。と言っても顔を手で隠してだが…

「怪我とかしてないかな？まぁそれはどうでもいいんだけど…此処って何処か知らない？」

「酷いです！私の心配はどうでもいいって…というか此処を知らずに来たんですか？」

「ああ、まぁ一応、色々あって…まぁ俺の名前は佐々木仁、１４歳、君は？」
「…私はティアと言います。貴方の名前は変わっていますね？」

「ああ、まぁな。で此処は何処なんだ？」

「此処ですか？此処は惑いの森ですよ？一応魔物が出るって警告されてて普通の人は入らないんですけど…」

なに！？此処は魔物が出るって…さっきの熊みたいな奴か！？弱くね？危険じゃないよね

「いや、違う。この場所じゃなくて…この世界の名前だ」

「おかしなことを聞くんですね？此処はラルクです。この世界、ラルクは８つの大陸からなっていて…ここに属している大陸はファースという大陸です。
他の７つはセカス、サーズ、フォーア、フィフィア、シクス、セベル、エイクとなっています。でも何でそんな事を聞くんですか？普通この世界の人なら誰でも知っていますよ」

「まぁ、誰にも話さないと約束してくれるなら話してもいいんだが…」

「しますから話してください」

「即答だな。まぁいいや、手短に言うと俺はこの世界の住人じゃない」

「へぇ～そうなんですかぁって…えぇぇぇぇぇ！？」

「まぁ驚くのは無理ないか…」

「後で聞きます。詳しく、それで貴方はこの世界が分からず教えて欲しいと？」

「まぁそうなんだけど」

「じゃあ教えてあげましょう。そのかわり貴方、顔くらい見せたらどうなんですか？」

「見せなきゃダメか？」

「ええ、大丈夫です。どんな酷い顔でも引いたりなんてしませんか

ら」

「じゃあハイ」

俺は手をどける。まぁ顔は普通と認識しているから笑われたりはしないだろう

「……」

「あれ？どうして喋らないの？」

ティアは顔が固まっており、喋らない…ていうかティアって結構な美少女だと今更気付く、

まぁこれが世に言う金髪碧眼と言う奴なのだろうか？

「…貴方は自分の容姿をどう思っていますか？」

「何を突然、まぁ普通くらいかな？」

「それが普通ですか？そうですか、貴方の居た世界はそんなにカッコいい人がいたんですか？」

「え？どういう意味？」

「貴方、十分カッコいいです…ていうか貴方なら…まぁいいです」

あれ？顔が赤いぞ？どうしたんだろう？まさかっ惚れた！？な～んて

「で、説明をしてくれティア此処はどういう世界だ？」

「…えっ、ええごめん、ちょっと考え事を、この世界ねぇ、貴方、

魔法は知っている？」

「いや、知らない」

「そう、この世界には魔法という物が存在していてね、今は日常でも魔法が使われている世界なんだけど…まぁ魔法は自分の中にある魔力という物がなくては使えないけど…
でも魔力が無くても全然生活できるわ…ただちょっと笑い者になるけどね。」

「へぇ、そうなのか…」

俺は驚いていた。まさかこんなファンタジーな世界があるのか…と

「それでまぁお金の話をするわ。単位はディラ、1ディラとかそんな感じで言うのよね
…そういえばお金で思ったんだけど…貴方、お金とか家とかあるの？」

俺は言われて気付いた。なにも無い！

「……」

「やっぱり無いの？」

彼女は俯いて聞いてくる。俺は頷く事しか出来なかった。

「…じゃあ私の家に来る？」

「え？」

彼女は衝撃的な事を言った。

「本当に！？…でもいいのかな？親とかは」

「大丈夫よ。お母さんは優しいしお父さんは甘えれば許すし…それに私の家、結構お金持ちなのよ…だからいいよ？」

親バカってこういう人の事を言うのかな？

「ならお願いするかな…まぁ色々な事を後で教えてくれ」

「ええ、いいけど…とりあえず帰りましょうか」

「ああ、よろしく頼む」

俺はティアの隣に並び、ティアの家へと歩き始めた。

第2話（後書き）

誤字脱字などがあった場合ご連絡ください

第3話（前書き）

今回は字数が少し少ないです

第3話

ティアの案内のより俺はすぐに森を抜けられる事が出来た。その間魔物とは遭遇せずに安全だった。そして今、俺はこの世界の街を歩いていた。キレイに塗装された石造りの床に左右に並ぶ家、俺の住んでいた所で言う中世ヨーロッパ的な感じのいい所だった。ティアの後に続き俺は辺りを見回しながら着いていった。

「でかっ！？」

俺はティアの家へと来ていた。その家は…うん、豪邸だった。大きい鉄の門の先には広い庭があって正面の奥にみごとな豪邸、

「言ったでしょ？まぁまぁ稼いでるから、私の親」

「そうなのか…」

言葉が出ない…すごい広い

「さぁ入って」

「ああ、お邪魔します」

中は更にすごかった。広い廊下の左右にいくつもの部屋があり、中には数人のメイドさんがいたから…

「さぁお母さんとお父さんに紹介しなきゃ」

ティアは言うと手招きを俺にしてきた。どうやら来いと言うことら

しい、
「お父さん、お母さん入るよ」
ティアは一言そう言うと扉を開けた。扉の中の部屋にいたのはティアの両親だろうか？
男の方は堅実そうな顔をしていて若々しい、が女の方は更にすごかった。
歳的に２０歳くらいに見られるのではないか？というくらいに若かった。
男の方は此方…正確にはティアの方を見ると立ち上がり、
「ティア～我が愛しの娘～よくぞ帰ってきた！」
抱きついた。あ、女の人に耳引っ張られて悲しそうにイスに座っている…親バカだ。
「ところで、ティア？その男の子は誰なの？」
今度は女の方がティアに聞いている。ティアは俺と会った時の事や魔物から助けてもらった事を話して此処に住まわせて欲しい事も言った。
「そうだったのか…君、名前は？」
男の人が聞いてくる。
「佐々木仁です」
「そうか、仁君、娘を助けてくれてありがとう。住む所が無いならここにいてくれても構わない」
優しい！お父さん優しい！

「仁君、ありがとね？私の事はもうお母さんって呼んでいいからね？というか呼んでね？」

女の人も優しい！

「それでね？お父さん、お母さん、私、仁も学園に行かせてやりたいの、いいでしょ？」

ん？学園って？

「そうだな、学園は全寮制だし、いいだろう面倒は私が見るから、仁君と一緒に学園に行ってきなさい。」

「ちょっといいですか？学園って？」

「ああ、君もティアと一緒に学園に通いなさい。お金とかなら私が面倒を見よう」

え？ちょっと待って…俺の意見は？

「やったね？仁？私と学園いこうね？明日（あした）から」

「明日ぁ～～！？」

え？ちょっと急展開、待ってぇ、俺の声は3人には届かず…そのまま決定しましたとさ

チャンチャン、

それからもうすぐに俺の入学手続きは終わり、制服も届き、俺は学

園に行かざる終えなくなった。ていうかこの家とは明日でお別れジャン！学園って！
俺は与えられた部屋の布団に包まり寝ようとしていた。そこに俺の部屋に入ってくる人の気配がした
扉の方を見るとティアだった。ティアは寝巻きのボタンが外れて下着…ヤバくね？
「仁～寝よ♪」
ティアは甘えるような声で此方によってくる。
「いや、ティア、待て、俺達まだ子供だよな？だからそういうのは…」
「？何言ってるの、この世界ではそういう行為って１５歳からしていいんだよ？」
「待とうか！ちょっと待とう！俺の世界では普通…」
「今はこの世界だよ？だから仁、しよ？」
ティアはもうすでに布団に入ろうとしていた。このままでは！俺の理性がっ！
「ティア！今日は一緒に寝るだけにしよう！な？添い寝！それでいいだろ？」
俺は必死に弁解する。

「…？仁ってもしかしてヘタレ？」

グサッ

「いいよぉ一緒に寝よ、添い寝添い寝～」

俺はティアの言葉の暴力を受けて布団の上に倒れてそのまま寝た。

「仁、寝ちゃった？じゃあ」

ティアは寝ている仁の頬の軽くキスをして、

「今度は口と口だよ？おやすみ」

おやすみの挨拶をして…眠りについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3845y/

最強の辿る道

2011年11月10日03時07分発行